

ごうなか
郷中遺跡(本発掘調査B)

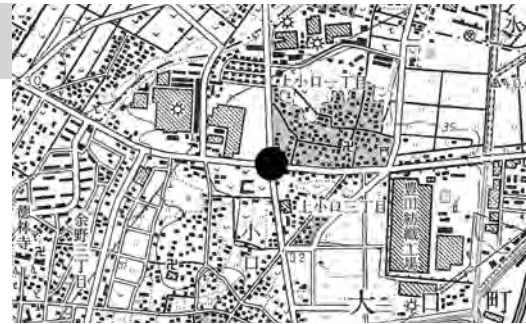
所在地 丹羽郡大口町上小口一丁目地内
(北緯35度20分48秒 東経136度55分03秒)

調査理由 交差点改良工事(一般県道斎藤羽黒線)

調査期間 令和4年7月～9月

調査面積 370㎡

担当者 堀木真美子・武部真木



調査地点(1/2.5万「犬山」)

調査の経過 調査は、交差点改良工事(一般県道斎藤羽黒線)に伴うものであり、愛知県建設局道路維持課から愛知県県民文化局を通じた委託事業として行った。調査対象地は上小口交差点の東西方向道路の北側にあたり、交差点を挟んで西側をA区、東側をB区と設定した。調査面積は計370㎡である。

立地と環境 大口町は尾張北部の犬山扇状地の扇央部に立地し、遺跡は隣接する扶桑町との境界に近い市域の北部に位置する。標高は31m前後である。近辺には多くの遺跡が分布し、旧石器時代の西山神遺跡や縄文時代の下林遺跡、後期古墳の善光寺古墳などが知られている。

調査の概要 A区の東端は小規模の谷状地形であり、これより西側に縄文時代中期後半の竪穴建物5棟、貯蔵穴の可能性のあるやや大型の土坑3基、中世の溝・土坑が確認され、縄文土器・石器、須恵器・土師器・陶磁器類が出土した。B区は後世の改変が激しく、主に近世から現代の遺構と思われる石列を伴う落ち込みや土坑・ピット等が見つかっている。

A区竪穴建物のうち遺存状況の良好な086SIは、当初径約8m規模の円形に近い隅丸方形のプランと検出されたが、少し位置の異なる竪穴建物の重複と判明した。竪穴の深さは検出面から約40cm、床面側壁際に幅20cm程度の壁溝(099SD)が巡る。より内側にも並行する溝(098SD)があり、先行する竪穴の痕跡として認められる。近接して086SIに先行する竪穴建物2棟が壁溝(073SD,074SD)で確認でき、さらに西へ約20m離れた地点にも一辺約4.0m規模の隅丸方形の壁溝(010SD)が確認された。遺物を伴う遺構は限定的ではあるものの、縄文時代中期後半を中心とした土器深鉢と数点の石器が出土している。

まとめ この一帯で活発化する縄文時代中期後半の集落の様相を伝える良好な事例となると考えられる。

(武部真木)



A区 竪穴建物(086SI 西から撮影)



縄文時代中期深鉢(085SK 縮尺1/6)